

1983年、私がミズーリ州のカンザスシティにいた時のことです。ある女性宣教師の話聞いて、私自身も宣教師になる決心をしました。

私は、チャールズ・シーレンと申します。生まれも育ちもアメリカのオクラホマ州です。小学校のときにクリスチャンになりました。私と妹が育ったのは、教会の送迎バスが近所の子どもたちを日曜学校に送迎してくれる時代でした。ですから、私の子ども時代は教会生活が中心でした。中学、高校と進むにつれ、神を主として生きることに対する捉え方も成長しました。神が愛情に満ちた親しい一対一のつながりを私との間に求めてくださっていると理解し始めたのは、大学一年生のときでした。

1983年の冬、キャンパス・クルセード・フォー・クライストの創設者ビル・ブライト師が、キャンパス・クルセード最大級の集会の開催場所としてカンザスシティを選びました。カンザスシティ 83には、ジョシュ・マクドウェル師、ハワード・ヘンドリックス師、ビリー・グラハム師など著名な説教者が名を連ねました。そこに、南米の原住民への伝道経験について語った女性宣教師エリザベス・エリオット師がいました。夫のジム・エリオット師について語る彼女の証の終盤で、神が私も神の働きに加わるように招いてくださっていることを悟りました。

妻のテレサと出会ったのは、大学4年生のときです。私たちは教育学専攻でしたが、大学を卒業するころには、イエス・キリストの福音を聞くチャンスのない人たちに福音を伝えるパートナーになりたいとお互いに思っていました。そして、私が神学校の一年目の一学期を終えた 1988年 12月に結婚しました。

1992年に私が神学校を卒業し、私たち夫婦は北海道の函館に派遣されることになりました。慣れるまではたいへんでしたが、しっかり奉仕できました。私たちが始めたグループが教会へと育っていくのをこの目で見ることができました。また、この期間に息子のコリンも生まれました。

函館での2年間の派遣期間を無事終え、私たちはアフリカやインドなどもっと肉体的にハードな国で「本物の長期宣教師」になる準備をしていました。日本での滞在はそれほど悪くはありませんでしたが、私の心は日本以外の場所に向いていました。

神が私たちを神の働きに招いてくださるとき、信仰と行動を要する信仰上の重大な局面に必ず立たされます。

私にとっての信仰上の重大な局面は、神が私たちを再び日本に召しておられると気づいた時でした。私たち夫婦は、所属している宣教団体のインターナショナル・ミッション・ボードの本部で過ごしました。そこには、世界中からあらゆる奉仕の機会についての知らせが寄せられます。南米、アフリカ、ヨーロッパ、アジア、熱帯の島などで教えたり、建物の建築をしたりといった奉仕者の募集が数多くありました。どれもこれもすばらしいチャンスのように思いましたが、私たちの心に響くものはひとつもありませんでした。夫婦揃ってこれだと思えるものがないことに戸惑いました。自分たちの派遣先が見つからないことに苛立ちを感じ、私はその苛立ちを「また日本に戻ればいいだけだ！」と口にしました。なんと、神が私たちを日本に戻るよう召されたのは、そのような状況でのことだったのです。

ここで私は、信仰上の重大な局面に直面しました。私自身がまったく興味のない土地へ帰るには、神を信頼しなければなりません。

私がエリザベス・エリオット師の話を聞いて、福音を聞くチャンスの少ない人たちに福音を携えていくために私も送り出されるのだと神がはっきり示してくださってから、**34年**になります。

そして、私たちが日本に来て**25年**になります。この間、神は私たち家族の信仰を育ててくださいました。それは、私たちが心と思いとたましいを尽くして主なる神を愛する愛によって、周囲の人たちに仕えることができるようになるためです。

ジム・エリオット師は次のように語りました。

「失うことのないものを得るために、持ち続けることのできないものを与える人は、愚かではない。」

聖書をお持ちの方は、創世記**24：1-9**を開いてください。

創世記**24：1-9**

24:1 アブラハムは年を重ねて、老人になっていた。【主】は、あらゆる面でアブラハムを祝福しておられた。**24:2** そのころ、アブラハムは、自分の全財産を管理している家の最年長のしもべに、こう言った。「あなたの手を私のもの下に入れてくれ。**24:3** 私はあなたに、天の神、地の神である【主】にかけて誓わせる。私がいっしょに住んでいるカナン人の娘の中から、私の息子の妻をめとってはならない。**24:4** あなたは私の生まれ故郷に行き、私の息子イサクのために妻を迎えなさい。」**24:5** しもべは彼に言った。「もしかして、その女の人が、私についてこの国へ来ようとしないうち、お子を、あなたの出身地へ連れ戻さなければなりませんか。」**24:6** アブラハムは彼に言った。「私の息子をあそこへ連れ帰らないように気をつけなさい。**24:7** 私を、私の父の家、私の生まれ故郷から連れ出し、私に誓って、『あなたの子孫にこの地を与える』と約束して仰せられた天の神、【主】は、御使いをあなたの前に遣わされる。あなたは、あそこで私の息子のために妻を迎えなさい。**24:8** もし、その女があなたについて来ようとしなければ、あなたはこの私との誓いから解かれる。ただし、私の息子をあそこへ連れ帰ってはならない。」**24:9** それでもしもべは、その手を主人であるアブラハムのもの下に入れ、このことについて彼に誓った。

神学者たちは、創世記**24**章は予型だと言います。

予型とは、しるしや型によって何かをあらかじめ示すものです。簡単に言えば、予型はこれからやってくる何かを象徴する絵のようなものです。

聖書には予型が数多く含まれます。旧約聖書の随所には、恵みの現れであるイエス・キリストが描かれています。創世記**22：1-14**でアブラハムは息子イサクを祭壇でささげようとしませんが、ご存じのとおり、これも予型のひとつです。

この予型の例では、神が父、私たちが子、そして御子イエスがカルバリ山での犠牲となられたことを示します。これは、私たちの罪が赦されるために父なる神が御子なる神を与えてくださったことを示す聖書の予型です。

今日の箇所では、父親が息子に花嫁を迎えようとしています。比較的目立たない内容ですが、これもひとつの予型です。それほど話題にもなびませんが、これは美しい恵みの描写です。神が私たちを送り出すために探し出し、花嫁にしてくださいることを、美しく描いています。

私たちは、イエス・キリストと結婚しています。これから、私たちがどのようにしてイエスと結婚するに至ったかをお話していきましょう。

この話には、**5人**の人物が登場します。最初の**9節**までに登場しない人物もいます。その**5人**とは、アブラハム（父なる神）、イサク（御子なるキリスト）、リベカ（贖われた者、教会、私たち）、エリエゼル（神のしもべ、すでに家にいる者）、御使い（聖霊、花嫁を探しに行くしもべの前に行く）です。**9節**までに登場しない人物は、次回の箇所で触れます。

今日は、次回の内容の序章として**3つ**のポイントを挙げていきます。

息子のために花嫁を得る話に含まれている内容は次のとおりです。

1. 出かけて行って花嫁を得るようにという命令。「あなたは…行き、」(4節)

4節で父親がしもべに「あなたは…行き、」と語っています。

イエス・キリストが昇天なさる前に弟子たちに語られたとき、「あなたがたは行って、」と今日の個所と同じ命令をなさいました。これは驚くことではありません。私たちが主のもとに来て世と決別するよう招かれたのではなく、世の中に出ていきなさいと命じられたのです。

伝道とは、救い主を必要とする人々にキリストについて分かち合うことですが、これは口を開いて語りなさいという命令です。

説教する資格が自分にはあると思う人はどれほどいるでしょう。残念ながら、説教という言葉は現在では資格がなくてはできないという捉えられ方をしています。新約聖書に登場する「ケーリュッソー」というギリシャ語の単語は、新しい一日の始まりを毎朝告げる行為を指して使われました。説教・宣教という単語は、この「ケーリュッソー」から来ています。「鳥がケーリュッソー、つまり知らせられるなら、誰にでもできるはず」というわけです。

そこで私は、21世紀版の「ケーリュッソー、説教」に当たる言葉を考えてみました。皆さん、噂話はできますか。

もしできるなら、福音について噂してはどうでしょう。以前の私たちが恥ずかしい人間で、孤独だったことを話し、救い主イエス・キリストがどれほど恵み深くすばらしいかについて話すのです。

イエスのもとに来た人はすでに結婚した人です。もう花婿に会いに来て、その麗しさと愛と恵みを知りました。主の励ましの言葉に元気をいただいたら、主は私たちに「行きなさい！」と送り出されます。家族のところに行って救い主のことを話しなさい、友だちに会って赦しについて分かち合いなさい、職場で、学校で、周囲の人のところで…。

今日の個所から、花嫁を得るには行かなければならないことがわかります。

2. 花嫁を得るために出かけるとき、その犠牲を考慮しなくてはなりません。

父親がしもべに行きなさいと命じたとき、しもべは5節で「もしかしたら…」と答えました。

もし彼女が来ようとしなかったら…。こんな場合は、あんな場合は…。

あなたも、キリストについて誰かに分かち合うよう神に促されたら、こんな不安を抱くでしょうか。

もし相手が嫌な気持ちになったらどうしよう。

恥ずかしい思いをしたらどうしよう。

宗教にどっぷりはまったおかしい人だと思われたらどうしよう。

あんなふうになったら、こんなふうになったら…。

信仰を分かち合うことには犠牲が伴います。そして、それを考慮に入れなくてはなりません。

さて、しもべは、「もしかして、その女の人が、私についてこの国へ来ようとしないう場合、」と尋ねました。これに対して父親は、「私の息子をあそこへ連れ帰らないように気をつけなさい。」と答えます。

アブラハムは、自分が送り出され、別の場所に移されたことを悟っています。私たちが真の意味で「別の場所に移される」体験をしたなら、もう後戻りはありません。アブラハムは、神を信頼するという模範を示しています。

最後のポイントです。

3. キリストのために出かけて花嫁を得るとき、大きな慰めがあります。

父親は7節で、「【主】は、御使いをあなたの前に遣わされる。」と言います。

イエスのことを人に話さない一番の言い訳は、「何と云えばよいかわからない」でしょう。

そういった不安や恐れを乗り越えるために、どう話せばよいかを教えるプログラムはたくさんあります。

ここで注意すべきなのは、こういったプログラムは良いものですが、気をつけていないと、私たちについて、そしてキリストが私たちのために何をしてくださったかについて心から話すという大事なことを忘れてしまいます。そして、私たちの証は型にはまった味気のないものになってしまいます。

何を云えばよいかと心配しないでください。聖霊が先を進んでくださるからです。イエスが弟子たちにおっしゃったように、福音を分かち合おうと出かけていたら迫害に遭うこともあります。けれども、そのような緊迫した場でも、主が私たちに言うべき言葉を与えてくださいます。

「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」ルカ 12:12

これはすばらしいみことばです。というのも、必要なときに聖霊が言うべきことを教えてくださると語っているからです。

私たちの伝道がうまくいっていない理由のひとつは、必要なときに御霊がことばを与えてくださるかどうかが試していないからでしょう。

最後に申し上げます。天の父と私たちの関係は、私たちが人をキリストに導けなかったと言って父なる神が腹を立てられるというようなものではありません。私たちの証で誰かが救われるたびに表彰されるようなこともありませんし、反対に、誰も信じてくれないからといって、バツ印をつけられるようなこともありません。

神と私たちの関係はまったくそのようなものではありません。この個所で、しもべは言っただけで話すことさえすれば、責任を果たしたことになります。父親はしもべのエリエゼルに、良い返事をもらえなくても、「あなたは私の誓いから解かれる。」と言いました。

神によって別の場所に移され、送り出された者にふさわしい恵みが私たちに与えられますように。そして、私たちがキリストのために花嫁を得るために出かけていけますように。

次回は、聖霊とエリエゼルが私たちを見つけ、私たちに救い主の必要性を認めさせたことについてお話します。

そして、花婿のもとに行ったりベカが私たちであることを学びます。